

## 29

## 上州の種痘再考

青木 歳幸

佐賀大学特命教授

上州地域での牛痘種痘の先駆者は館林の長澤理玄である。嘉永3年(1850)ころに、種痘医桑田立斎に入門した長澤理玄は、修業すること2年余りで館林に帰り、種痘を開始した。しかし、彼の種痘は広まらず、みかねた藩の重役岡田磋摩助の子女4人に接種できた。が、やはり広まらなかったので父の門人のいる上ノ山へ向かい、そこでの成功をもとに、館林でようやく種痘をひろげることができたという[遠山1918, 石村2002]。しかし、古西義磨氏は遠山元長『引痘弁疑』に、「又長澤理玄先生も嘉永四年辛亥の秋より同五年壬子の年まで種る処三千七百零一人」とあることから、館林でも一定の普及をみたと述べている[古西2007]。約一年間で3701人への接種は誇張があるが、館林で当初から全く普及しなかったわけではなさそうである。

横尾村の名主家出身で、高野長英門人高橋景作は、種痘を近隣に弘めたと、『中之条町誌』などにある。しかし景作の日記を仔細に読めば、そうでもなかった。景作日記のなかから種痘記事をさがすと、意外と遅く、安政七年閏三月四日「霜降甚寒し○嵩月来牛痘種を持来る、孫に種痘を施す」とあり、俳句仲間の高月から牛痘種を入手し、孫のリヤに接種している。同年閏三月一六日「雨昨朝より止まず○種痘祝いをする。鴨田川洪水橋を引く」とあり、孫娘への接種は無事成功した。同年閏三月二一日「前夜より晴甚寒し○栃瀬孫に牛痘を接す○八兵衛頼母子○廿八日晚勘四郎頼母子申来る。栃瀬孫の良平は一〇歳で外孫にあたる。先に内孫のリヤに施し、今度は外孫の良平に接種した。その後、文久四年甲子年日記には、四月二六日、「晴霜降○中之条野口氏へ行牛痘の種を取来る」とあり、中之条の医師野口良甫のもとから牛痘の種を持ってきて、翌四月二七日に、昨年生まれたばかりの内孫にあたる松三郎に牛痘種痘を実施したが、今回は「無効」とあり、善感しなかった。景作の種痘は、身内に対してだけのものであった。

ではどのように地域へ種痘を広げたかという点、万延二年(文久元年)十月七日に大事な記事がある。「七日晴○山本星岳来ル、当八月出府大槻俊斎へ入門、種痘館へ出、種痘免許を請今日帰宅○此種痘館ハ安政五年午年春江戸神田お玉ヶ池ニ種痘所を取建、専ら種痘を施したるに同年冬火災にかかる、同六未年又々下谷泉橋通りに再び営ミ爰にて弥弘く種施したるに、昨万延元年冬公儀の種痘所となる、是西洋家医学館なり」と、門人の山本星岳が江戸の大槻俊斎に入門し、種痘所で一ヶ月余りの種痘術などの修業をして戻ってきたことが書かれている。こうして門人の山本星岳らが帰郷して近隣への種痘を行ったのだろう。

高崎藩では、安政2年(1855)に藩主松平右京亮の子息鷹之丞、生後4ヶ月の赤児に江戸屋敷で「移痘(種痘)」を行っている[丸山1958]。藩主側役の原小兵衛の日記から、この「移痘」の流れをみると、安政2年3月23日に佐倉藩医三宅良斎が接種した。種痘は順調な経過をたどり成功した。丸山清康氏はこれを人痘とすが、接種者が蘭方医三宅良斎であり、佐倉では既に牛痘接種を実施していたので、これは牛痘種と解すべきである。後に高崎藩医工藤常直が、江戸の種痘所で修業後、高崎で種痘館を開き、工藤常直の子孫工藤俊榮は、明治3年(1870)2月に種痘免許状を得ている[新編高崎市史資料篇8近世, 2002]。